

1. 授業の基本情報

対象授業の「社会科教育法1」は、科目区分「教科又は教職に関する科目」に相当し、中学校（社会科）・高等学校（地理歴史科）の教員免許状取得に必要な科目である。本授業は、中学校社会科(地理的分野・歴史的分野)、高等学校地理歴史科の歴史、内容構成、授業構成について理解することで、中等社会科授業開発力の向上を目指すことを目的としている。この目的を果たすために、授業では、社会科授業に関する理論とそれに基づく具体的な実践について考察を行った上で、授業開発を実際に行った。本授業の登録学生数は法文学部29名、教育学部29名の合計58名だった。登録学生のほとんどが学部二年生だった。

2. 授業評価・授業研究の内容

授業評価を行うために①【知識・理解】、②【技能】、③【思考・判断・表現】、④【興味・関心】に関するアンケート調査を行った。なお、各質問に対して、「1とてもそう思う・2ある程度そう思う・3あまりそう思わない・4授業の目標・内容がこのDPとは無関係である。」という四つの選択肢を設定し、2018年7月に調査を実施した。このアンケート調査結果を受け、授業改善に向けた方向性についての考察を行った。

(1) 知識・理解について

【知識・理解】の質問内容：教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を習得している。

- 1 とてもそう思う 32名
- 2 ある程度そう思う 20名
- 3 あまりそう思わない 2名

4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

【①の結果に関する考察】

アンケート結果から大半の学生は、本講義を通して教育と教職に関する知識を習得できたと感じていることがわかる。一方で、教育と教職に関する知識や得意とする分野の専門的知識を習得できたとはあまり思わない学生も数名いる。講義内容は、主に歴史的分野や地理的分野の授業について取り扱ったが、学生自身がどの分野を得意としているのか、得意としている分野の知識を深めていくためにはどのようなことを行えばいいのかという点について理解させるための指導を行う必要があると感じた。

(2) 技能について

【技能】の質問内容：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。

- 1 とてもそう思う 19名
- 2 ある程度そう思う 29名
- 3 あまりそう思わない 6名
- 4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

【②の結果に関する考察】

アンケート結果から大半の学生は、本講義を通して教育活動に取り組むための技能を身に付けることができたと感じていることがわかる。一方で、「あまりそう思わなかった」と感じている学生が11名いる。このことは、学生は授業作りのために、必要となる技能についてのイメージを持っていない、もしくはイメージしにくいことを意味しているといえる。よって、授業改善のためには、教育活動に取り組むための技能とはどのようなものなのか

を具体的に明示し、その技能を高めるための方法について指導する必要があると感じた。

(3) 思考・判断・表現について

【思考・判断・表現】の質問内容：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について、専門的な知見をもとに、その対応方を理論に基づいて総合的に考え、その過程や結果を適切に表現することができる。

- 1 とてもそう思う 23名
- 2 ある程度そう思う 27名
- 3 あまりそう思わない 3名
- 4 授業の目標・内容がこの DP とは無関係である 1名

【③の結果に関する考察】

アンケート結果から大半の学生は、本講義を通して教育現場の課題を捉え、その対応策を考えることができていることがわかる。講義の中で、授業に関する課題だけではなく、「ブラック部活動」など教育現場で起こっている具体的な課題を事例として取り上げたことが、この結果につながっていると推察できる。一方で、「あまりそう思わない」や「授業の目標・内容がこの DP とは無関係である」と答えた学生もいる。授業改善の視点としては、社会科授業を開発する上で生じる課題に特化し、継続的にその課題解決の方策について考えさせる活動を行うことが有効ではないかと考える。

(4) 興味・関心について

【興味・関心】の質問内容：教師としての使命感や責任感を持ち、自己の課題を明確にして理論と実践とを結び付けた主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする。

- 1 とてもそう思う 31名
- 2 ある程度そう思う 23名
- 3 あまりそう思わない 0名
- 4 授業の目標・内容がこの DP とは無関係である 0名

【④の結果に関する考察】

アンケート結果からほとんどの学生が、本講義を通して教師としての使命感を持ち、社会科授業に関する学習に主体的に取り組もうとしていることがわかる。本講義を通して学習したことが、教育現場にどのようにかすことができるのかという点を明示することが、学生の学習意欲の向上につながっていると推察できる。今後も、理論と実践を結び付け、教育現場の課題を克服するための力を段階的に育成できるように継続的な指導を心掛けていきたい。

3. 「地域社会を核にした教育と研究のつながり」について

本授業では、主に二つの取組を通して、「地域社会を核にした教育と研究のつながり」を具現化しようとした。第一に、愛媛大学教育学部附属中学校の社会科教諭を外部講師として招き、学校現場で求められる社会科授業についての事例紹介や指導案の作成方法に関して解説をしてもらった。これによって、教育現場で求められることについて理解させることができ、自分たちが今学んでいること（社会科の目標論を中心とする理論）が、学校現場でどのようにかすことができるのかを実感的に捉えさせることができたと言える。第二に、愛媛を代表する地域資源を教材として取り扱った授業開発を事例として紹介した。具体的には、「なぜ愛媛県といえばみかんが有名となったのか？」という主題について考えさせる中学校社会科の授業を事例として示すことで、愛媛という地域を教材化する具体的な方法に関して理解させることができ、地域資源をいかした授業開発を行う力を育成することにつながるという。

以上のような取組を行うことで、学生の社会科授業の開発力を育成することを目指してきた。このような取組によって、ほとんどの学生の教職に関する興味・関心を喚起することができた。一方で、授業開発を進めるため

の技術に関しては、十分に育成できたとは言
い切れない点が課題といえる。なぜならば、
本授業では学生自身に授業を開発、実践させ
評価するという一連の授業研究の流れを体験
させ切れていないからである。また、多くの
学生が学部二年生ということで、教育実習を
体験するまで約1年の期間があるため、授業
開発のための技術を学ぶ必然性や切実性を感
じることができていない傾向にあると感じた。
今後は、これらの課題を克服する為に、学生
の授業開発に対する考えをふまえ、授業を改
善し、授業開発力の高める授業を展開でき
るように努めたいと考えている。